



ボブのコン サート



marudo88

20年ぶりで、旧友、小池から電話がかかってきた。この旧友とは昔、気まずいことがあったが、今はもう、笑っている仲だ。そして、ひとしきり、共通の友人、知人の消息を語り合ったあと、自然とそれぞれの、家族、自分自身の近況に話が及んだ。旧友は今、二人の子持ちで、とある小さな村の、村長をしているという。

「すごいな、村長さんか！ 出世頭やんかあーっ！」

「たいしたことないよ。兵庫県、何々郡1314番地、字何々の、何々村など、誰も知らんて。おまけに、大企業ならともかく、ド田舎の、公務員……、へっ」

公務員なら、いいと思うんだが、ド田舎の公務員など、貧乏の代名詞らしい。私は、同情を禁じ得なかった。そうして、徐々に電話があった時、一瞬、仲違いした原因が、お金貸して返ってこなかったことも、言うのはやめようと思った。そうしたやり取りの中、小池が私に言った。

「そや、じぶん、ボブディランのファンやったやろ」

「よう覚えてくれてるなあ。そうやねん、わし、来日する度に、コンサート行っててな」(関西弁で、「じぶん」とは、「君」のことをいう、くだけた言い方である)

思わず自分の顔がほころんだ。こいつ、俺がディランのファンだったことも、覚えていてくれとる。今年も来日予定は知っていたが、あいにくここ3ヶ月、失業中だ。とても買えない。だが、心配するので失業のことは、旧友には黙っておこう。

「じぶんやっぱ、ボブディランのファンなんや。嬉しいなあ」

「それを言うのはこっちやで。よう覚えとってくれた。ちなみに、今回のチケットは、まだ買ってないんや」

「え、なんでや？ 里中ほどの、ボブのファンが」

「そうやねん。ちょっと、わけありでな」

「金欠か？」

「……」

「なあ、話変わるけど再開を祝して、こんど、飲みに行かへんか？」

こちらの気持ちをおもんばかり、話題を変えてくれたのだ。昔はもっと、がさつだったと思うが、にんげん、まるくなっている。なごやかに電話は切れた。

20年ぶりに旧友と飲みに行くというのも悪くないかと、ニタニタしながらひとりの煎餅布団をかぶって、うとうとしていると、突然、真夜中に電話があった。私は、お金がないので携帯電話は持っていない。固定電話だけだ。

「おいっ、起こしたか」

「いやあ～、ええよ」

「寝ぼけてるかー」

「ちょっとな、わははは」

「じつはな、耳より情報や。ボブ～ふにゃふにゃ、チケットとれたぞー」

「えっ、とれたんか！」

「喜ばしたろ、思てな。ほな、おやすみー」

「おやすみー」

旧友は、お金借りたことを忘れてはいなかった。もちろん、貸した金額はボブディランの一回分のチケット値段よりはるかに多い。でも、その心が嬉しかった。せめて、利息分でもと、迷っていた俺の心を察して、チケットをプレゼントしてくれるというのだろう。

いきなり後ろから、肩を強く叩かれた。痛いなあと思って振り向くと、満面の笑みをたたえた旧友の顔があった。

「ようっ、待ったか？」

「いやあ、ちょっとだけやで」

「なにゆうてんねん！ いまきたとこやでって、言うんが友達やろがっ！」

「あつ、そうか。すまんすまん」

「変わってへんなあ、里やんわあ～」

「ははははっ」

ひとしきりまた、昔話に花が咲いた。ここ阪急西宮北口駅前、むかし、旧友と通った高校の通学路だ。いま私は大阪市民で、旧友小池は、まだここ、西宮に住んでいると言う。ここから、兵庫県の田舎まで、村長しに行っているのだろう。

「じぶんも、ここから職場通うの大変やろ？」

「え、なんで？」

「いや、何々郡やろ、たいへんやんか。村長さん」

「え？ ああ、そうや。たいへんやぞ。わははは、それより、飲もうや。カンパーイ」

1時間もうだうだして、だいぶ酔いもまわって、いい気分になってきた。

「そうやそうや、忘れるとこやった。じぶん、ボブディランのチケット渡したろ、思てな」

小池はポケットから紙封筒を取り出した。

「じぶん、わかってくれててんなあ！」

私は、酔いも手強い、感極まって泣いてしまったのである。小池は私の肩をぽんぽん、痛いほど叩き励まし、

「4月12日、土曜日午後7時、行けるか、行けるか」という。

「いつでも行けるよ。わしな、じつは失業中やねん。いや、心配せんでもええ。今日は楽しかった。ほんま、楽しかったよ」

旧友にももらったコンサートチケットを、落とさないようにゆっくりと、ズボンのポケットに入れる。

「じゃ、1まん5せんえん」と、小池は手を出した。

「えっ？」

ええっ？ 利息がわりやなかったんか。まあええか。でも、15000円で。

「ちょ、ちょっと待ってくれよう」

なごやかにふたりは店を出て、私は近くのコンビニの自動支払機で、15000円を出して小池に支払った。

4月12日の夜、封筒からチケットを取り出す。旧友からは、あの夜からは電話はかかってこない。おれも行けたら行くしな、と言っていた。が、村長の仕事も忙しいのだろう。よく考えたら、コンサートチケット買って、行けなかったら大損だろう。まだ買ってないのかなと思った。

チケットを改めて見て、驚いた。たしかボブディランは今年は、日本だけに来てくれるということ、何かで読んだ。そして、大きくはない会場、お客と語り合いたいとも言っていたらしい。けれどもこんな、西宮北口駅からさらに奥まった、路地の奥みちな小さな居酒屋兼ライブハウスに、来るものなのだろうか？ ま、いいだろ。ディランさんは、予測できないアーティストやからな。そんなひとり言をいいつつ、チケットの裏に描いてある地図のとおり歩くと、ぼろい居酒屋の表に立て看板があり、「ボブディオン、コンサート」

ボブディオン？ チケットをよく見ると「ボブディオン」と書いてある。そうして、居酒屋の奥がちょっとしたステージになっ

ており、どう見ても日本人の、かなり年のおっさんが、へたくそなギターを弾いて、なにやら聞いたこともない歌を、日本語で歌っていた。

チケットも高かったしもったいないので、たくさん空いているなかの、ひとつの椅子に座って、聞き続けつつ、携帯持っていないので、早く帰って真相を確かめたかった。あくびの出るライブの最後まで律儀に聞いてから、立ち上がる時に、その、日本人のおっさんに、後ろでヘタなタイコをたたいていた、太鼓腹のおっさんが、「小池さん、ご苦労様」というのが聞こえた。小池さん？

西宮北口から時間かけて大阪市の家まで帰り、旧友に電話で問いただしたら、じぶん、ポプディオンと納得して買う、言うたやないかという。その、ポプディオンは、自分の兄弟かなんかか？ 名字が一緒のようやがと聞くと、知らんという。

「じぶん、たしかにポプディオンに、納得の返事したやんけえーっ！」

「お、落ち着け小池。それにじぶん、ほんまに村長なんか？ もういっぺん、どこの村長か、詳しく言うてみいや。わしメモとってえ、そいでえ、問い合わせ……」

「うるさいわーっ！」

と逆ギレされ、電話が切れた。またも絶好状態に。

いま私は、本物のポプディランのチケット、買っとけば良かったと思う。ポプディオンこと小池何某の歌は、さっぱり覚えてないのだった。ただ、旧友の兄弟？に、ちょっと経済で人助けしてやったことと、20年ぶりで西宮北口を歩いたことが、良かったかな？ と思った。

(終)

ボブのコンサート

<http://p.booklog.jp/book/109031>

著者 : marudo88

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/marudo88/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/109031>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/109031>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ